

道標

「いいね、いつも若い人に囲まれて」と友人は冗談交じりに言う。確かに、学生と一緒にいると元気が出る。年を取ったためだけでもないと思うのだが、学生は年々おとなしくなっている。世間やマスコミが「最近の若者は」としたり顔で嘆いたりするが、取り巻く環境がこれだけひどいのに黙って耐えているのだから褒めてやればいいのに、などと思ったりする。

私にとって、いつしか子供の世代を過ぎて孫の世代に近づいている学生は無条件でかわいい。時には親御さんに見せない素顔を見せることもある。

ある日、普段は返事もしない愛想の悪い学生が研究室を訪ねてきた。「母ちゃんが犬を買った」。返事に困って「『母ちゃん』ではなく『母』と言いなさい」と言っていると聞いてみる。「今度

ゆとり教育見直し

無駄な経験の有益さ

「こぞ子育てに失敗しない」として訓練している。かわいさうで、母(かあ)も、母が居ないときに思いっきりかわいくなってやるんだ」「ふーん。ところで君、兄弟はいるの」「いや、一人っ子」。思わず吹き出してしまふ。母親の気持ち

村川 庸子



敬愛大国際学部教授

2011.12.4

険はしない。新聞はもちろん、テレビも見ない。主たる情報源はインターネットだが、社会のことは見たくないという。道理で文句も言わないはずだ。

先日、週一回教えている母校のゼミで「外国に行きたがらない若者」が話題になった。彼女たち自身は研修やボランティアで繰り返し外国に行く。他大学の学生が外国に行きたがらないのは行かなくても情報が手に入るからだと言う。「じゃあ、あなたたちは何故行くの」と尋ねると「先生たちも皆、勧めてくれるし、先生たちの経験を聞いて憧れて」と言う。私自身も学生時

ちはよく分かる。何を言っても堪えないから、嫌みの一つも言ってみたいのだらう。その母親に抗議することでもできなかったのだらう。

こんなナイーブな学生が多いのだ。が、「良い子」過ぎて心配になる。目

代「外国研究をする者はその国を見続けていなければ」と繰り返言われたことを思い出した。

外国に行かなくても情報が入手できる？ 確かにITや通信技術の発達は大量の情報を守時に、しかも必要な分

ふるさと伝言

だけ与えてくれる。だが、それだけで全てが理解できると本当に思っているのだろうか。私と同世代の人たちは異口同音に「それは違う」と断言し「実際に外国に出てみたら、本やネットに載らないその他のいろいろなことだたくさんあって、その総体の中で理解することが大切なのに」と言う。

今のような風潮も教育の責任が大きい。行き過ぎたゆとり教育を認めてきたのはわれわれの世代である。教科書の分量を少なくし、できるだけ「効率的な」教育を目指した。われわれ自身は無駄な経験を多く持っていたが、子供たちには「その他いろいろ」を切り捨ててから手渡した。われわれが無駄だと思っ捨てたことが「総体」を理解するには必要だったことにあらためて気付かされる。

グローバル化の時代。先進諸国は高度技術者を好条件で求め、多くの若者が海外を目指す中、日本の若者だけが引きこもっている状況はいかにも悩ましい。「ゆとり教育」の見直しが始まっている。

(むらかわ・よこし、今治市出身)